

科目と学年の壁を越えた協働のススメ

～新任教員・大学院生の話も交えて～

津田ひろみ（元明治大学、現神奈川大学・武蔵大学）

当分科会は国語と英語を併せた「言語分野」の分科会でしたが、多くは英語科の関係者でした。前半は参加者 10 名程度で、科目・学年・学校を超えた集まりである TSUDA 教職勉強会の紹介に続き、明治大学大学院生・永野百合愛さん、新任教師・土屋拓己先生が新しい授業案を発表しました。そして、後半は、若手英語教師および英語教師をめざす学生の皆さんの疑問について、ベテラン教師を含む 6 名の参加者で意見交換を行いました。参加者の中には、以前筆者の教職科目を履修していた学生さんで現在は中学校の教師という懐かしい顔も見られ、とても懐かしく嬉しく思いました。その他にも知り合いの先生が参加してくださり、和気あいあいとした雰囲気が進みました。

1. TSUDA 教職勉強会とは

本勉強会は明治大学国際日本学部の英語科教育法と授業デザイン論の履修生の要望によって 2 年前にスタートしました。総合数理学部の学生さんも加わり、さらに筆者が現在務める他大学の教職課程履修者が加わり、英語科、数学科、社会科、さらに国語科と理科のメンバーが揃いました。当初は模擬授業の練習や教育に関する問題点について考え、意見交換していましたが、そのうちに教員の問題を少しでも解決し、一方で、生徒の理解を深める方法を考えようということになりました。本勉強会は教科・学部・学年を跨いでいるので、その特徴を活かしてさまざまな教科の学習内容を知ることができたのです。1 年目は毎週集まって話し合い、学生が中心になって学会発表にも挑戦するなど、かなり積極的に活動しました。しかし、4 年生が卒業し、教師、大学院、塾講師などそれぞれの道で多忙を極めるようになるにつれ参加できる時間帯や期間が限定されるようになり、明治大学関連の参加者は激減しました。一方で、他大学では 3 年生が引き継ぎ、さらにオンラインの活動が始まると理学部の 2 年生も加わり、以前にも増して多様な背景をもつメンバーが集うようになり、いろいろな科目の模擬授業の練習をしたり、それに対するコメントをしあったりしています。活動場所も明治大学だけでなく武蔵大学も加わりました。現時点の問題は、現役教師が仕事や部活指導のため多忙なため参加が難しいことです。塾講師は更に多忙なようで参加できなくなりました。現在の勉強会の登録者の内訳は以下のとおりです。

表 1. 参加者所属・専攻内訳 (2025)

(名)

	英語	社会	数学	国語	理科	計
明治大学	4	1	2			7
武蔵大学	23	2		2		27
神奈川大学			3		1	4
現役教師	5		3			8
計	32	3	8	2	1	46

2. TSUDA 教職勉強会の活動

通常の活動は、第一木曜日は明治大学中野キャンパスで、第三木曜日は武蔵大学教職実践室で、第四木曜日はオンラインで、それぞれ行っています。主な活動は先にも述べましたが、教育実習や採用試験で行う模擬授業の練習をしたり、疑問点について話し合ったり、他の科目の視点からの気づきを述べ合ったりしています。そして、自分の専門科目以外の模擬授業からは想像以上に多くの学びを得ることができましたし、授業者も科目を超えてさまざまな観点からコメントをもらって良い準備ができました。また、先輩が出席した時には教育実習で悩んだことや楽しかった経験を話してもらいました。教育新聞のトピックから部活の外部委託やいじめなどの問題を取り上げて話し合ったこともあります。科目や学年を超えてさまざまな視点からの意見を交換し合う場として、本勉強会の果たす役割は大きいと感じています。

昨年度は11月に明治大学教育会に、そして3月にはJACET 主宰の『言語教育エキスポ』に参加し、学生メンバーが学会発表に挑戦しました。エキスポでは、最初に勉強会で洗い出した教職の問題点を明らかにし、次に各問題点について分担者が詳細を発表しました。教職志望者数の減少の大きな原因として、GIGA スクール構想による仕事の増加、学習の個別最適化の実現に向けた仕事の多様化、それらを原因とする精神的ストレスの増大、の3つを取り上げ具体的な数字や事例を挙げて説明しました。最後にそれらの問題点を踏まえた解決策として、現在の科目ベース・カリキュラムから脱却し、生徒の理解の深まりに加え教師の同僚性を高めることが期待される「クロス・カリキュラム」へ移行することを提案しました。その後、参加者は小グループに分かれて話し合いましたが、グループによってはCLILや教科横断型授業と混同し、現場での実践は無理だろうという意見も聞かれました。しかし、私たちがめざすのは協働学習の理念に基づいた、教科間で関連する項目をみつけ教科を超えて学習内容の連携を図る授業です。私たちの提案を理解した現役教員から前向きな実践報告もあり、さまざまな視点から有益な意見交換がなされました。

発表後の勉強会で、エキスポの話し合いをそのままにしてしまうのはもったいないとの意見が上がり、ハンドブックにまとめることになりました。学生や新任教員は教科を超えた「クロス・カリキュラム」に基づく授業案を提案し、ベテラン教師は現場での実践と生徒たちの反応や効果について報告しています。現在、3月の『言語教育エキスポ』で紹介できるようハンドブックの準備を進めています。

3. 「クロス・カリキュラム」とは

本勉強会が提案する「クロス・カリキュラム」は一言で言えば「教科間協働型学習」であって、「教科横断型学習」とは違います。もっとも大きな相違点は、教科横断型学習を行う場合は両教科の教師が綿密に話し合い協働で指導案を作成するため時間的・身体的負担が増えるという問題が予想されます。一方、本勉強会が提案するのはクロス・カリキュラムに基づく教科間協働型学習であり、異なる教科の関連する単元をみつけてその部分は専門教科に委ねる、つまり、異なる教科の教師が得意分野を分担して協働するのです。そうすることによって、生徒は複数の科目の知識を融合してひとつの学習項目を多角的に捉え、理解を深め「自分ごと化」しやすくなるでしょう。また、苦手な科目であっても他の

科目から興味をもつ糸口を掴むことができるでしょう。そして、教師にとっては時間的負担を増やすことなくむしろ負担を減らし、教師の孤立を防ぐことに繋がるはずです。そして、教師も他教科の視点から新しい知識を学ぶことが期待できます。

例えば、高校の英語テキストにあるマンデラ大統領の単元では、南アフリカ初の黒人大統領となりラグビーを通じて白人と黒人の差別をなくし国をひとつにまとめた偉人として取り上げられています。ある高校の英語教師は体育教師を授業に招いてラグビーについて話してもらったそうです。歴史が苦手な筆者ならば、当時の世界情勢や南アフリカのアパルトヘイトなどの社会背景を社会科で前もって学習してもらいたいと思います。そうすることによって導入にかかる英語教師の負担が減るだけでなく、生徒は当時の社会背景の中でマンデラ大統領の業績をより深く理解することが期待されます。さらに、当時の南アフリカの社会問題に関する知識があれば、試合後に敵味方なくハグし相手をリスペクトし合う「ノーサイド」というラグビーのもつ平和の精神をも理解することができるでしょう。このように、英語テキストの表面的な理解が体育や社会の知識と関連づけられることによって立体的な知識となり理解が深まることが期待されるのです。

次に、本分科会で院生と新任教師が発表したクロス・カリキュラムに基づく授業案を紹介します。

4. 「数学的に世界を理解する」(数学科×英語科)

明治大学大学院文学研究科1年 永野百合愛

修士課程の永野さんは、高校2年生の数学に新しく入った「統計」の単元と高校2年生の英語リーディングテキストの「統計」に関する単元を関連させた授業案を提案しました。数学と英語を関連づけることによって、統計の理解が英語の読解をスムーズにし、英語の文章が統計を生徒にとって意味のあるトピックにするという授業案でした。数学の問題解決能力と英語の読解能力が補足し合って生徒の理解を深めることを示す授業でした。

5. 「新任として教壇に立つ重み:授業を面白くするために」(数学科×経済)

川越東高等学校教師 土屋拓己

埼玉県の私立高等学校教師1年目の土屋先生は、生徒が経済の問題を身近に感じ、自分の将来の資金繰りを考えるきっかけになるような資産運用シミュレーションを提示しました。その後、参加者に結婚予定年齢、出産予定年齢、子どもの人数、教育費・娯楽費・食費の贅沢度などを実際に設定していただき、エクセルに当てはめて将来の資金繰りをシミュレーションしました。数学と経済を結びつけた授業を参加者の皆さんにも体験し楽しんでいただきました。

6. 参加者の皆さんとディスカッション「若手教員の課題にどう取り組むか」

後半は参加者の皆さんと話し合いの時間をもちました。トピックは主に、授業の導入部をどうするか、文法をどのように教えるか、English onlyの授業は効果的なのか、という3点に絞られました。どの点についても結論が出たわけではありませんが、皆さんの意見をご紹介します。

1) 授業の導入部について

- ・生徒を惹きつけるのに重要な部分である
- ・そのためにはトピックを生徒の生活に密着させ「自分ごと化」するのが効果的である
- ・心理学的な側面からは「伝える」ことを大事にする必要がある
- ・パワーポイントで動画や写真などをうまく取り入れることができる
- ・TMには導入に必要な資料がすべて英語で書かれており、パワーポイントもそのまま利用できる形で準備されていて、それを利用することも可能ではあるが、生徒の深い理解や興味につなげることは難しい。

<筆者からの提案>

TMに頼るより他教科の学習内容と関連させて「教科間協働型学習」を取り入れるほうが生徒への説得力があり効果的でしょう。そして、導入部分を孤立させず、本文に関連づけて生徒の興味・関心を引き起こすような小さな問いを入れながら進めるのが良いのではないかと思います。

2) 文法の教え方について

- ・授業では **interactive** な言語活動が中心になっている
- ・その中で文法を明示的に教えることは難しい
- ・学校では英会話、塾では文法、という役割分担ができてるのが現状
- ・しかし、学校でも基礎文法はしっかり教えて学習させるべきだろう
- ・学校によっては、英語の授業が「総合英語、英語文法、英会話」に分割されている。その場合はとても教えやすい。

<筆者からの提案>

模擬授業のクラスでもいつも問題になりますが、文法をある程度明示的に教えることは生徒の頭の中を整理するのに必要だと思います。ただ、それだけで終わってしまうと概念だけが頭に残ってしまい使える英語になりません。概念を教えた後で、できるだけ多くの例文を必要に応じてイラストと一緒に示し、生徒がその文法事項を使う場面をイメージできるまで口慣らしをすることが必要ではないでしょうか。それができたら、先生の例文にならって生徒に少し練習させ、さらに自分のことを英作文してもらいます。そこまでできれば明示的な文法説明も概念理解だけに終わることなく、「自分ごと化」まで進められると思います。

3) English only の授業について

- ・学習指導要領では中学1年生から **English only** で教えるよう指示されている
- ・しかし、急に英語で授業をしても生徒は戸惑うだけだろう。
- ・中学1年生から少しずつ授業の中で英語を増やしていき、慣れさせるのが良いのではないか。
- ・文法も簡単なものは英語で説明するのではなく、**target** 文法を使った例文を示し、生徒に気付かせる方法なら抵抗なく理解されるのではないか。
- ・論理表現では日本語で教えた方が良いだろう。

- ・ALTの授業では英語を中心に、必要に応じて日本語を補えばよい。
- ・教えている生徒によって、日本語と英語の割合を変える必要がある。
- ・English only はあくまで手段であって目的ではない。したがって、つけたい力（目標）によって日本語と英語を使い分けるのがよい。
- ・英語で説明してから、必ず日本語に直すと生徒は日本語を待ってしまい、英語に耳を貸さなくなるので良くない。
- ・大学の授業で模擬授業をするときに English only の授業をするよう指示されるが現実的ではないのではないかな。
- ・確かに、現場ではなかなか English only で授業を進めることは難しいだろうが学校によってはそれが要求される場合もあるので、大学で English only の授業を一度経験しておくことは良い準備になるのではないかな。

<筆者からの提案>

目の前にいる生徒が理解できるかどうか、でしょう。様子を見ながら調整するのが良いと思います。レベルの高い学校や帰国子女のクラスがある場合は English only の授業が求められるでしょう。そういう時のためにも機会があるなら一度経験しておくことも悪くないのではないのでしょうか。多くの場合 English only の授業は大学生向けかもしれません。

4) おまけ

- ・3年生から、社会が好きだけれど英語のほうが教員になる機会は多そうだからどの科目で教員免許を取るのが良いか迷う、という質問がありました。
- ・先輩からの意見は2つに分かれました。実用的な、つまり就職しやすい科目を選ぶべき、という意見と、あくまで自分が好きで興味を持てる科目を選ぶべき、というものでした。

<筆者からの提案>

大学卒業時に東京都の英語教師の募集がなかったため筆者はやむなく外資系の銀行に勤めましたが、どうしても充実感が得られませんでした。

そういう経験をもつ筆者としては、好きな科目を選ぶのがベストだと思います。専任教員になれるまで非常勤講師をしながら初志貫徹してほしいです。

もし、余裕があるならば、その間に研究科に進んで2年間（国によっては1年間）勉強するのも良いのではないのでしょうか。

7. 終わりに

生徒の協働はかなり進んできていると思いますので、次にめざすのは教師の協働でしょう。この分科会のタイトルは「科目・学年の壁を超えた協働のススメ」ですが私たちの目標のひとつは、教師に対するネガティブな評判を払拭し教職の魅力を伝え、教職希望者を増やすことです。ここで発表した「科目を超えた協働」が多忙な教師の負担を増やすことなく同僚性を高めることに繋がり、教師の孤立を防いで精神的なプレッシャーから解放する一助になれば嬉しく思います。そして、教職希望者を増やすためにも、教職の魅力の後輩の若者に伝えていくことが明治大学教職課程に長くお世話になった筆者に課されたミッションだ

と考えています。勉強会はそのひとつの道として始めました。目下準備しているハンドブックのタイトルは『教科をまたぐ、学びを拓く―教師連携によるクロス・カリキュラムの授業デザイン集―』ですが、これは勉強会の若いメンバーのアイデアです。表紙の絵もメンバーのひとりが描いてくれます。若い人たちの発想の豊かさや柔軟さにはいつも驚かされます。そして、彼らと一緒に勉強できる時間は楽しくて幸せなひとときです。

本勉強会の登録者数はかなり増えましたが、毎回の参加者は限られています。アルバイトが忙しいか、あるいは教職にそこまで関心のある学生が少ないのではないかと思います。今後は、模擬授業を練習する機会を増やしたり開始時間を変更するなど、参加しやすい勉強会にするための工夫をして毎回一定数の参加者を確保したいと考えています。

本分科会では、「言語」というキーワードを軸にさまざまな背景の参加者が集い、意見を交換することができました。正に、私たちの研究会が目指す「科目と学年の壁を越えた協働」の世界をここで実現できましたことを大変嬉しく思います。

このような機会を与えていただき、本当にありがとうございました。